

マッキオロとエリアーデの往復書簡における 「宇宙的キリスト教」の問題

奥山 史亮

(和文要旨)

ミルチャ・エリアーデ (Mircea Eliade 1907 - 1986) は、自身の宗教学を構築する際にイタリアの宗教研究者たちをモデルとした。とりわけ神秘主義やオルフェウス教の研究者として知られるヴィットーリオ・マッキオロ (Vittorio Macchioro 1880 - 1958) からは、宗教現象を社会的歴史的コンテクストに還元せず研究するための方法論を受容した。マッキオロとの交友の中で、エリアーデはさまざまな歴史的諸宗教の基層として「宇宙的キリスト教」という存在を認識し、その普遍的特性を言語化する作業に着手するようになった。そして戦後においては、亡命知識人としての問題意識に突き動かされながら、政治的イデオロギーを超えて諸民族、諸宗教が連帯するための価値規範としてこの概念を再定位するに至った。この「宇宙的キリスト教」という概念は、エリアーデが、歴史的諸宗教の下には時代地域を超えた普遍的な宗教性が存在するという信念を抱きながら、宗教のあるべきかたちを指し示すために用いた、宗教倫理的な価値概念であったと考えられる。本稿では、このような概念が構築されてきた過程を整理することで、宗教学という学問に抱合される価値規範をめぐる問題について考察する。

(SUMMARY)

Mircea Eliade used Italian religious researchers as models in constructing his own religious studies. In particular, he adopted the methodology of the researcher of mysticism and Orphism, Vittorio Macchioro, who studied religious phenomena without reducing them to their social historical context. In the process of acquiring a friendship with Macchioro, Eliade came to recognize that at the foundation of the various historical religions there lies a "cosmic Christianity", the universal characteristics of which he undertook to articulate. After the war, prompted by the problem

consciousness of an intellectual in exile, Eliade came to define this concept as a valuative norm for the solidarity of various ethnic groups and religions beyond political ideology. This concept of "cosmic Christianity" was based on Eliade's belief that universal religiosity exists at the base of historical religions, and he posited this as an ethical value concept for religious belief showing the form that religion should take. This paper, by spelling out the process by which he arrived at the concept of "cosmic Christianity", considers the problem of the valuative norm that is embedded in religious studies.

1. 問題の所在

宗教学者の提示する「宗教」は、その研究者の身を置いている政治的偏向やイデオロギー的な負荷を背負い込んでいることが指摘されて久しい。宗教概念は、近代ヨーロッパのプロテスタントイズムをめぐる政治的状況を背景に形成された歴史的認識様式であり、非ヨーロッパ地域や近代以前の現象を分析する概念としてはそぐわないという批判である。歴史的認識様式である宗教概念をあらゆる地域・時代の分析に持ち込むことは、近代西欧の学的基準を「普遍的なもの」として位置付けることになる。

しかし、宗教概念の構築にかかわってきた宗教学者たちは、各時代の政治的、文化的課題を意識しながら宗教研究を実施してきたのであり、彼・彼女らの描く「宗教」が何らかの政治的負荷を帯びていること、さらにその政治性が倫理的な価値規範を伴っていることは自然なことであると考えられる。宗教概念の政治的偏向やイデオロギー的な負荷を指摘するのみでなく、それらはどのような歴史的コンテクストにおいて、如何なる倫理的価値判断を迫られる状況において生じるに至ったのかを検討する必要がある。それにより、近代西欧の歴史状況から強い影響を受けながら成立した宗教学の学的性質、および「宗教」を研究するという営みそのものに含まれる倫理的問題を考察することが可能になると考えられる。

本稿では、20世紀宗教学の展開に大きくかかわったミルチャ・エリアーデ (Mircea Eliade, 1907 - 1986) がイタリアの神秘主義・オルフェウス教研究者として知られるヴィットーリオ・マッキオーロ (Vittorio Macchioro, 1880 - 1958) と交遊するなかで、「宇宙的キリスト教」という学的概念を構築するに至った過程をたどる。この概念は、宗教学者は諸宗教に共通の特質を抽出することにより、すべての宗教にとって相互理解が可能になる場を提示すべきである、とりわけ政治的に抑圧されている人間の宗教的価値をあらゆる人間にとつ

て理解可能・共有可能な言葉に翻訳できるよう再定位すべきである、というエリアーデの倫理的判断を基層に有すると考えられる。エリアーデがこのような価値規範の実現を目指しながら「宇宙的キリスト教」について思考した歴史状況を整理することにより、宗教学者が自身の宗教的信念に基づいて新たな価値規範の提示を試みた一事例として示し、現代における宗教研究と倫理をめぐる問題の考察に資することを目的とする。

2. マッキオロとエリアーデの往復書簡

(1) 20世紀初期のイタリアにおける宗教研究

ミルチャ・エリアーデは、自身の宗教学を構築する際にイタリアの宗教研究者たちをモデルとしている。一方では、イタリア宗教史学派の学祖といわれるラッファエーレ・ペッタッツォーニ (Raffaele Pettazzoni) とその弟子であるE・デ・マルティーノ (Ernesto De Martino) からは、宗教を歴史的生成物とみなす宗教史学の方法論を取り入れた。他方では、神秘主義・オルフェウス教の研究者であるヴィットーリオ・マッキオロからは、宗教現象を社会的歴史的コンテクストに還元せず研究するための方法論を学んだ可能性が想定される。とりわけマッキオロからは、後述するように、政治的偏向や経済状況による影響を受けない、宗教の「普遍的な」特性を抽出するための方法論を学び取り、「宇宙的キリスト教」という独自の概念を提示するに至ったと考えられる。まず20世紀初期のイタリアにおける宗教研究の状況、およびイタリア人研究者とエリアーデの交友を整理したい¹。

エリアーデは、1925年にブカレスト大学文学・哲学部に入学し、ルーマニアのフォークロアや神話、宗教、文学の研究に着手した。当時のブカレスト大学は、近代的な学術活動を実施するだけの環境が整っていなかったため、西欧の先進的な研究成果を輸入することに力を注いでおり、エリアーデも西欧の宗教研究、哲学、文学の受容につとめるようになった。とりわけエリアーデがその受容につとめたのは、地理的、言語的にもルーマニアと近い関係にあるイタリアにおける宗教研究の成果であった。イタリアでは、19世紀末から20世紀初頭にかけてイタリア王国とヴァチカンの対立が先鋭化し、国立大学の神学部が1873年に廃止されたことを受け、ローマ・カトリックに偏らず諸宗教を等しく研究する学問領域の創設が求められるようになった。そしてムッソリーニ政権下の1923年に宗教史学講座がローマ大学に創設され、ペッタッツォーニがその主任教授に任命された。ペッタ

¹ イタリアにおける宗教学・宗教史学成立の背景については、江川純一『イタリア宗教史学の誕生——ペッタッツォーニの宗教思想とその歴史的背景』(勁草書房、2015年)を参照している。

ツォーニはムッソリーニ政権崩壊後もローマ大学宗教史学講座の教授として宗教史学の制度化と普及につとめ、その門下にはデ・マルティーノをはじめとする優れた宗教史学者が集うようになった。ペッタツォーニの門下においても、研究対象や方法論全般に関して見解が一致しているわけではないが、あらゆる宗教が歴史的生成物であり、社会文化的コンテクストによって条件付けられているというペッタツォーニの立場を共有した研究がなされる傾向にある。とりわけ「聖なるもの」や「祖型」のような超時代地域的な概念を設定することなく、神話や儀礼が展開する歴史的コンテクストを学的対象とすることから、ペッタツォーニの門下は「イタリア宗教史学派」と呼ばれるようになった。

さらに当時のイタリアにおいては、ペッタツォーニに代表される宗教史学派のほかに、キリスト教の立場から宗教を対象化しようとするヴィットーリオ・マッキオロやエルネスト・ブオナイウティ (Ernesto Buonaiuti) といった研究者たちも活動していた。彼らは R・オッター、ファン・デル・レーウらに代表される宗教現象学の成果を積極的に受け入れながら、時代や地域を超えた宗教の普遍的性質を把握することを試みた。エリアーデは、とりわけマッキオロと深く交遊し、宗教研究の方法論に関して多くの議論を重ねていた。

(2) エリアーデとマッキオロの交友

マッキオロは、神秘主義とオルフェウス教の研究者として活躍し、ナポリの古代博物館館長を務めた人物である。1880年にトリエステで生まれ、ボローニャ大学で芸術学や考古学を中心に学んだ。大学卒業後は、考古学の研究を継続するなかでオルフェウス教と神秘主義の研究に従事するようになり、『ザグレウス:オルフェウス教研究 (*Zagreus: Studi sull'orfismo*, 1920)』などの代表的著作を刊行した。マッキオロの方法論は、宗教は哲学や歴史学的な知識の対象になりえず、体験的にその意味を把握しなければならないという見解に依っている。のちにみるように、エリアーデはマッキオロを自身のモデルとしており、その研究成果を積極的に受容しようと試みている。インドに留学し、ヨーガを体験的に研究したことも、マッキオロの研究を意識した結果であった可能性が想定される。

エリアーデとマッキオロは継続的に書簡を交わしており、そこから両者の交流を確認することができる。現存している最初の書簡は、正確な日付が記されていないが、1926年の1月にエリアーデがマッキオロに宛てて送ったものである²。この手紙はマッキオロに対す

² *Europa, Asia, America... Corespondenta*, Vol. II, Humanitas, 1999, pp. 109-110.

る敬意を表すためイタリア語で執筆されており、マッキオロの研究はルーマニアでも強い関心を持たれていること、大学から刊行予定の雑誌においてマッキオロの研究を詳細に紹介したいという希望、『ザグレウス』以外の著作はルーマニアでは入手が困難なので送ってもらえないかという依頼が記されていた。マッキオロは、これらエリアーデからの要望に応じて自身の著書をブカレストの住所宛に郵送するほか、ペッタッツォーニをはじめとするイタリア人研究者をエリアーデに紹介している。

エリアーデはマッキオロの好意に対する礼状を同年5月に送った。この手紙は、イタリア語の執筆能力に不安があるためフランス語で執筆されているが、そこにはルーマニアは研究施設や環境の面で大きく遅れているため学術雑誌や研究書を充実させなければならないこと、宗教学の領域ではマッキオロやペッタッツォーニ、フレイザーの著書を紹介したり翻訳したりする必要があり、自分がその役割を担いたいということが記されている³。同年6月のマッキオロ宛書簡には、マッキオロの神秘主義研究に関するエリアーデの礼賛的な見解が記されており、神秘主義に関して初めて論文を執筆し、東洋の神話や儀礼を分析したこと、この論文においてマッキオロの研究を引用していることなどが報告されている⁴。

エリアーデとマッキオロの学説については、別の機会に詳細に比較整理しなければならないが、マッキオロは宗教、哲学、科学はそれぞれ人間存在の異なる次元にかかわるものであり、宗教の意味を理解するためには独自の研究領域が要請されると考える。さらに、神秘主義は社会的、物理的環境を離れた領域であらたな精神性を得るための手段であり、合理的な知の対象になり得ないため、体験的にその意味を把握する必要があると主張している。また、マッキオロは宗教学者・宗教史学者であることを自認しており、常に複数の宗教を比較する視点を持っていた。オルフェウス教に関する研究も、ギリシア・ローマ時代の儀礼と近代の民間宗教の儀礼を比較しながら分析していた。ただし、同時代のペッタッツォーニが宗教を歴史的生成物とみなし、その歴史的コンテクストの分析に取り組んだのに対して、マッキオロは宗教が心理、精神に及ぼす独自の影響に着目する研究を展開しており、このようなマッキオロの研究は、エリアーデが宗教を還元不可能な現象とみなし、その独自の意味を把握する方法論を確立する際のモデルになったと考えられる。

エリアーデは1927年のイタリア旅行において様々な街をめぐり、その途中のナポリで

³ *Ibid.*, pp. 112-115.

⁴ *Ibid.*, pp. 118-120.

はマッキオロを訪問し対談している。マッキオロはエリアーデを自宅に招待して歓迎し、ルーマニアとイタリア両国の文化について、さらに政治体制について意見を交わした。マッキオロは、当時のムッソリーニ政権に対する批判を口にするのを憚らず、ファシズム政権下で生活することを拒否し、イタリアを離れたいという希望をエリアーデに伝えた。さらに、ムッソリーニ政権に協力する研究者を批判し、宗教研究者は現政権に対して強く警戒すべきであると主張したという。帰国したエリアーデは、『言葉 (*Cuvantul*)』という日刊紙でマッキオロとの対談を、政治的見解についても省略することなく記事にした。その結果、マッキオロは政権を批判した疑いをかけられ、尋問を受けるに至った⁵。

結局、イタリアの保安警察はエリアーデが外国人であるためイタリア語を理解できず、事実無根の記事を書いたというマッキオロの弁明を受け入れ、彼を釈放した。エリアーデは事態の把握後、謝罪の手紙を幾通もマッキオロ宛に送り、マッキオロはそれを誠意あるものと最終的にみなし、謝罪を受け入れた。エリアーデがこのような配慮を欠いた失態を犯した理由を説明することは困難であるし、本稿における重要な問題でもない。自伝に記されているように、政治感覚に乏しく「無邪気」であっただけなのかもしれない⁶。1928年3月29日付、同年7月付のマッキオロ宛書簡においても、若さゆえの経験不足で、浅はか極まりなく、取り返しのつかない過ちを犯してしまった後悔と謝罪が幾度も記されている⁷。しかしマッキオロに関する紹介文としてエリアーデが発表した書評論文においては、古今の宗教現象を比較し、宗教や文化のあり方を問い直すマッキオロの学的姿勢が賞賛されており、研究者の枠を踏み越えて現代的問題についても積極的に発言するマッキオロの言葉にエリアーデが強く共感していたことがうかがえる⁸。マッキオロをモデルとしていたエリアーデにとって、現代社会の問題について議論し、新たな価値規範を構築しようとするマッキオロの姿勢は、積極的に受容し、ルーマニアに紹介すべき対象と思えたのかもしれない。

3. マッキオロ宛の書簡における「宇宙的キリスト教」

⁵ Eliade, *Autobiography, Volume I, 1907-1937*, Harper and Row, Publishers, 1981, p. 126. 石井忠厚訳『エリアーデ回想 (上)』未来社、1989年、176頁。

⁶ *Ibid.*, p. 127. 前掲書、177頁。

⁷ *Europa, Asia, America... Corespondenta*, pp. 153-155, pp. 157-159.

⁸ Eliade, *Virilitate si asceza, Scrieri de Tinerete, 1928*, Humanitas, 2008, pp. 328-345. Eliade, *Arta de a Muri*, Editura Moldova, 1993, pp. 204-211.

1928年、エリアーデは卒業論文を執筆後、カルカッタ大学のセレンドラナート・ダスグプタ (Surendranath Dasgupta) のもとに留学するが、インドからも継続的にマッキオロに書簡を送っていた。これらの書簡では、インドの文化やサンスクリット文献、ヨーガの実践などが話題になっており、学問上の深い交流が見て取れる。とりわけ1931年3月15日にカルカッタからマッキオロ宛に郵送された書簡には、エリアーデが「宇宙的キリスト教 (Cosmic Christianity)」と呼ぶ信仰形式について詳述されている⁹。

「宇宙的キリスト教」とは、キリスト教と民間宗教の習合 (synchrétismes) を表現した造語であり、エリアーデが正統のキリスト教に対置するかたちで頻繁に用いる概念である¹⁰。エリアーデ宗教学においては、異なる信仰体系が習合することによって独創的であらたな宗教形式が生じ、聖性が時代・地域を超えて存続する現象が一貫して対象化されており、「宇宙的キリスト教」は聖性の普遍性と永続性を強調するための中心概念として位置付けられている。1963年に刊行された『神話と現実』においては、キリスト教の終末論と救済論が民衆的解釈を備えるようになった現象が論じられており、その中で「宇宙的キリスト教」の性質が以下のように述べられている。

東西キリスト教会は、あまりに多くの異端的要素を受容したとして非難されてきた。これらの批判が正統であるか否かは疑問である。一つには、「異教」は表面的ではあっても、「キリスト教化」されたかたちでのみ残存できたのであった。この根絶できない「異教」を同化するという政策は目新しいものではなく、初期教会はすでに前キリスト教時代の聖暦の大部分を受容し、同化していた。他方、農民は彼らの宇宙における生存様式のゆえに、「歴史的」キリスト教の道徳に惹かれなかった。農民たちに特有の宗教経験は、「宇宙的キリスト教」と名付けられるものによって培われた。言い換えれば、ヨーロッパの農民はキリスト教を宇宙的儀礼として了解していた¹¹。

エリアーデによれば、祖型の反復と始源への回帰に重きを置かないキリスト教の歴史観および救済観は宗教的エリートの所産であるのに対し、民衆層はキリスト教を受け入れたのちも祖型的存在論を保持して始源への回帰を継続する。そのため、ヨーロッパの農村地帯

⁹ *Europa, Asia, America... Corespondenta*, pp. 170-174.

¹⁰ 「宇宙的キリスト教」に関する詳細な分析は、Natale Spineto, *Mircea Eliade, Istoric al religiilor*, Curtea Veche Publishing, 2009, Douglas Allen, *Myth and Religion in Mircea Eliade*, Routledge New York and London, 2002. 奥山倫明『エリアーデ宗教学の展開-比較・歴史・解釈-』刀水書房、2000年を参照。

¹¹ Eliade, *Myth and Reality*, Waveland Press, Inc., pp. 170 - 174. 中村恭子訳『神話と現実』せりか書房、1992年、191頁。

では、キリスト教と民間信仰の習合が進み、「宇宙的キリスト教」という宗教形式が成立した。この「宇宙的キリスト教」においては、古来の宗教伝統が幾重にも折り重なることによって万物の聖性が伝承され、宇宙的ヒエロファニーが保持されるのである。

さらに宇宙的キリスト教は、そのアルカイックな宗教形式によって、不可逆的な近代的歴史観、「歴史の恐怖」への抵抗を保持するという役割も果たしてきたとエリアーデは主張する。東方ヨーロッパの農村地域では、キリスト教の教義が流布した後も、キリストが全宇宙を司り、周期的に農村を訪れる最高存在として信仰されてきたことをエリアーデは取り上げ、以下のような解釈を示している。

農民の宇宙的キリスト教が、イエスの出現によって神聖化された自然への郷愁によって支配されていることは明らかである。それは一種の樂園への憧れ、戦い、荒廃、征服がもたらす大異変から守られた、変貌し、不死身な自然を再発見しようとする欲望である。それはまた、間断なく多様な軍団に威嚇され、大小地主領主の各層から搾取されている、これら農耕社会の「理想」の表現である。それは歴史の悲劇と不正、つまり悪はもはや個人の選択ではなくして、ますます歴史的世界の超個人的構造であることが判明した事実に対する受動的反抗である¹²。

農村地域は祖型と反復の構造を保持することにより、軍事的侵略や経済的不均衡という「悪」に抗することができたという見解は、『永遠回帰の神話』における「歴史の恐怖」の問題と重なり合うものであり¹³、さらに遺作となる『世界宗教史』においても、聖性の永続性、宗教の反歴史的性質にかかわる議論として展開されるに至る¹⁴。

エリアーデがこの「宇宙的キリスト教」の概念をいつごろから用いるようになったのか確定することは困難であるが、きわめて早い時期の資料として、1931年3月15日付のマッキオロ宛書簡が挙げられる。この書簡はインド留学の最終年にカルカッタから郵送されたものであり、そこでは「宇宙的キリスト教」という着想を得たことが興奮気味に報告されている。エリアーデによれば、ルーマニアの農耕民はキリスト教を受け入れたのちも、

¹² *Ibid.*, p. 前掲書、193頁。

¹³ Eliade, *Le mythe de l'éternel retour*, Gallimard, 1969. 堀一郎訳『永遠回帰の神話』における、とりわけ第四章「歴史の恐怖」を参照。

¹⁴ 『世界宗教史』第3巻の第38章「宗教改革前後における宗教、魔術、ヘルメス主義の伝統」では、「宇宙的キリスト教」に関して『永遠回帰の神話』『神話と現実』を継承した議論が展開されている。Eliade, *Histoire des croyances et des idées religieuses III*, Payot, 1983, pp. 231-272. 鶴岡賀雄訳『世界宗教史 6』ちくま学芸文庫、2000年、68-122頁。

そのあらたな信仰のうちに古来の宗教的遺産を統合してきた。そうすることにより、万物が聖別された宇宙的秩序を保持してきたのである。エリアーデはすでに本書簡において、このようなルーマニア農耕民の宗教性を「宇宙的キリスト教」と呼んでいる。

なによりもわれわれルーマニア人は、「宇宙的キリスト教」と呼べるものに惹きつけられています。この世の万物が神に対する愛によって満ちている、鳥は聖別されており、樹木は我らの兄弟であると感じ取ることができます。わたしたちになじみの民間詩では、人間（ルーマニア人）と丘や森、獣たちが、神の恩寵によってもたらされた兄弟愛の絆をもっていると描かれています。〔中略〕。ルーマニア語では、「キリスト教徒」という言葉には「人間」という意味もあるのです。ルーマニアの農耕民は、「正しく」「善く」生きることのみが義務であり、その義務を果たしているかぎり、キリスト者なのです。農耕民にとってのキリスト教は、教義や外的な規範組織ではなく、創造性の基礎であり、現実生活を感じ取るものなのです¹⁵。

ここではルーマニア農耕民が、前キリスト教時代の宗教的遺産をあらたな宗教形式に統合することで保持してきたこと、そしてこのような宇宙的キリスト教は都市部の制度的なキリスト教とまったく異なる信仰形式であることが強調されている。さらにエリアーデは、宇宙的キリスト教はルーマニア農耕民だけでなく、インドにおいても確認されると主張している。すなわち、宇宙全体が聖性に満ちているという観念はインドの民衆のあいだにも見受けられ、その宗教形式はルーマニアの宇宙的キリスト教にきわめて類似している。そのためインドの民衆も宇宙的キリスト教を共有しているという。エリアーデの書簡によれば、キリスト教の救いとは宇宙的聖性の内に統合されることであり、それは教会やキリスト教の教義に依ることなく得られるものである。

キリスト教会の不寛容とヒンドゥーの寛容を比較してみたとき、私はたいへん傷つきました。キリスト教徒は、教会における洗礼と恩寵と働きを通さなければ救いは得られないと考えます。ヒンドゥーでは、神の歴史的代理人である教会制度の介入なしで、働きと恩寵のみに依って救いは得られると考えられているのです。私は、キリスト教は唯一の道ではないと考えはじめております。もしそうならば、改宗は意味のないものになります。教会とは社会政治上の問題であり、宗教上の問題ではないのです¹⁶。

ここでは、キリスト教の救いはキリスト教によらなくとも、宇宙的キリスト教を認識すれ

¹⁵ *Europa, Asia, America...Corespondenta*, pp. 170 - 171.

¹⁶ *Ibid.*, p.172.

ば得られるものであることが強調されている。理論的に整理されていない手書きの書簡であるため、後年の学説との詳細な比較検討が要請されるが、すでに宇宙的キリスト教の着想を得ることで宗教現象の普遍性を強調しようとする姿勢が見て取れる。エリアーデはこの宇宙的キリスト教の着想をインドで得て、直ちにマッキオロに報告したと考えられる。

既述のように、「宇宙的キリスト教」はエリアーデ宗教学における中心概念として一貫して位置づけられているが、1945年のフランスへの亡命を境としてその用法には変化がみられるようになる。すなわちルーマニア人亡命者組織の活動において、政治的少数派の宗教価値に着目しながら、異なる宗教文化の相互理解を可能にする場の創設を目指す、新たな価値規範として再定位されることになるのである。

4. 亡命者組織における「宇宙的キリスト教」に関する言論

(1) 亡命者組織の機関誌

エリアーデはフランスに亡命後、共産主義政権に抵抗する反体制運動に身を投じるようになり、故国を追われたディアスポラとして、歴史叙述に主体的に参加できない者の歴史を叙述することは可能かという問題に取り組むことになる。冷戦体制下において、エリアーデの故国ルーマニアは東側陣営の一国として共産党政権が敷かれ、旧政権にかかわった多数の人間は処刑されたり、強制労働所におくられたりした。さらにエリアーデが亡命したフランスも、各植民地で勃発する解放闘争に対処することを余儀なくされていた。これら眼前に迫る「歴史の恐怖」に対処しながら、戦前の概念について再考し、理論的体系の構築へとつなげることが、戦後におけるエリアーデの、宗教学者としての、さらに亡命知識人としての課題のひとつであったと考えられる。亡命者としてのエリアーデの政治的理念については、ほかの場所¹⁷で明らかにしたので詳述しないが、共産党の弾圧によって活動を制約された本国の知識人に代わり、亡命者が中心となりルーマニア民族独自の文化を創作し共産党支配下の文化を駆逐すること、さらにルーマニア文化のうちに「普遍性」を見出し、それを多文化と交友するための場所として提示することをエリアーデは目指した。そのような「普遍的な」場所を表すための概念が「宇宙的キリスト教」であった。

¹⁷ 奥山史亮「モニカ・ロヴィネスクの反体制運動におけるエリアーデ宗教学の展開」『東京大学宗教学年報』第31号、東京大学宗教学研究室、35 - 47頁、2013年。奥山史亮『エリアーデの思想と亡命—クリアースとの関係において』北海道大学出版会、2012年などを参照。

エリアーデは、戦後の亡命知識人が負っている文化的使命を「ヨーロッパと鉄のカーテン」という政治的論説にまとめ、1952年に亡命雑誌『論壇』(Tribuna)で発表している。当論説によれば、ヨーロッパの諸民族は衝突と融合を繰り返すことにより、さらにロシアやアラブ世界などの外来の文化を受容し改変することにより、重層的な文化をつくりあげてきた。この文化創造の過程において重要な役割を果たした要因として、キリスト教の文化統合機能が考察されている。

キリスト教が民衆の宗教的伝統の「公認化」と名付けられる精神活動を生み出したことはあまり知られていないが重要である。キリスト教の聖人伝によって、トラキアからスカンディナヴィアまで、またタゲからニップールまでの無数の地方宗教が「この母体に付け加え」られた。それらの「キリスト教化」によって、全ヨーロッパの神格や礼拝所は共通の名称を受け取っただけではなく、祖型すなわち普遍的性質を再発見することになったと考えられる。[中略]。キリスト教が浸透するまでは地方的、局所的であった民衆の神話は、エキュメニカルなものになった。キリスト教の文化的役割は、とりわけ、農村民たちに共通の神話的言語をつくり出したことにより、きわめて大きなものであった。農村民たちは、大地に根ざしたすべての社会がそうであるように保守的で、彼ら固有の伝統の中で孤立して石化してしまう危険があったが、「キリスト教化されること」によりきわめて古いヨーロッパの宗教的伝承は純化され質が高められただけでなく、あらたな精神的段階へと移行することができたのである。その精神的段階は、前キリスト教的な習慣や信仰、希望から「脱する」価値のあるものであった。キリスト教のうちには、今日においても、新石器時代に由来する民間儀礼や信仰が残存している。[中略]。たしかに他の諸宗教も同じように、先行の諸伝統を同化してきた。しかしながらキリスト教の功績はより大きなものである。なぜならば、キリスト教は大陸全体の過去の宗教を保存することで、それらを再評価すると同時に自らの内に組み込んできたのである¹⁸。

ここでは、キリスト教が数多くの民間宗教を統合してきたからこそ、古来の宗教的遺産がヨーロッパには残存しており、それが文化の基層となっていることが強調されている。このようなキリスト教の統合機能は、宗教学においてエリアーデが「宇宙的キリスト教」として主題化してきたものであり、それが政治的論説ではヨーロッパを分断している冷戦体

¹⁸ Eliade, *Impotriva deznadejzii, Humanitas*, 1992, pp. 154 - 155. この文章に関しては、奥山史亮、2012年においても引用し、分析を加えている。

制に抵抗するための文化的手段として再定位されたと考えられる。

既述のように、宇宙的キリスト教は古来よりさまざまな宗教的遺産を抱合し、ヨーロッパ文化共通の基層を形成してきた。そのため、現代ヨーロッパの諸民族は宇宙的キリスト教をみずからの宗教的遺産として認識することにより、相互の宗教文化の相違を理解し承認し合うことができるようになり、さらに鉄のカーテンといった冷戦の分断構造も解消することができるはずであるとエリアーデは主張する。

民族や地域のあいだには、たしかに特殊な差異や対立、両立不可能性、非還元性が存在している。それらはヨーロッパの宿命であるのだから。すなわち〔それらによってヨーロッパに生きる人間はたがいに〕差異化し、分離し、対話しようとするのだ。しかしこのような差異と共に「ヨーロッパ精神の礎」がきわめて重要なものとして立ち現れてきている。この礎とは、新石器時代からキリスト教、科学的思考の曙に至るまでヨーロッパの神話や真理によって育成されかたち作られたものである。昨日の、また今日のヨーロッパをかたち作っている数え切れないほどの対話が、結局、われわれは同じ言葉を話しているのだ、そして、同じ言葉を話す自由をもっているのだということを実証しているのである¹⁹。

ここからは、東側の社会主義陣営に組み込まれた故国ルーマニアにも「普遍的な」宇宙的キリスト教が存在しており、それはルーマニアが西側諸国と対話するための、さらにヨーロッパの各国が東西どちらの陣営に属しているかなどにかかわらず対話し理解し合うための基盤になるはずであるというエリアーデの政治的見解が見て取れる。「宇宙的キリスト教」とは、エリアーデにとって宗教学的概念であるのみならず、現代世界の課題に応答し、新たな価値規範を構築するための理念として展開したと考えられる。

(2) 「宇宙的キリスト教」から「宇宙的宗教」へ

以上、新たな価値規範としての「宇宙的キリスト教」について確認してきたが、普遍的な宗教形式を志向するこの概念に対して、依然として「キリスト教」という名詞がつけられている理由を考察し、最後のまとめへとつなげたい。

エリアーデがこの概念を提示するときには、既述の冷戦体制の分断を解消するという問題意識のほか、戦後世界においてヨーロッパ諸国が旧植民地国に対してどのように向き合

¹⁹ *Ibid.*, pp. 159 - 160.

い、どのような新たな価値規範を構築していくかといった課題を想定していたと考えられる。すなわち、戦後ヨーロッパ諸国は旧植民地国を対等な他者として認識し、対話するための準備を整えることが最優先の課題であり、そのような対話を実現するため、歴史的諸宗教の基層となる共通の領域を提示する必要があるとエリアーデは考えた。インドから帰国する直前、当地での体験に思いを馳せる自伝の場面にはつぎのように記されている。

私は中国と東南アジアから地中海とポルトガルにまで広がる全農民文明に共通な基盤の存在を少しずつ意識していった。至る所で私が後に「宇宙的宗教性」と呼ぶもの、すなわち象徴と図像が占める重要な役割、大地と生命への宗教的尊敬、聖は歴史的出来事を通してではなく肥沃と宇宙的更新の神秘によって直接啓示されるという信仰を指摘することができた。むろん、キリスト教はヨーロッパの農民文明を完全に変容させていたが、地中海的、そして東方的キリスト教は同時に「宇宙的礼拝」でもあったのだ。キリストの受肉、死、復活はいわば自然の聖化であった。彼を通して、世界はその原初の無垢、罪以前のそれを再発見したのである²⁰。

ここではキリスト教が「宇宙的礼拝」と解されており、マッキオロ宛の書簡における「宇宙的キリスト教」の描写と重なり合うと考えられるが、アジアからヨーロッパに至る共通の宗教的基層は「宇宙的宗教性」と呼ばれている。上記引用における「象徴と図像」の宗教史的役割、大地の宗教性、聖と宇宙的更新はいずれもエリアーデ宗教学における中心的主題であり、エリアーデはこれらの主題に取り組むことにより、インドで感じ取った「宇宙的宗教性」に接近しようとしたと考えられる。宗教の普遍的形式の把握を試みた宗教学者エリアーデがインドでの青年期の経験を回想した時（自伝執筆時の81年）には、「宇宙的キリスト教」よりも「宇宙的宗教性」という言葉の方が適切であると判断した可能性が想定される。

しかしそれでもなおエリアーデは、前章まで見てきたように、晩年に至るまで「宇宙的キリスト教」の概念を使い続けた。戦後、ディアスポラとして生きた亡命者エリアーデにとってこの概念は、東西陣営の冷戦体制および旧宗主国と植民地の対立といった世界の分断に対して、ルーマニア人としての解決方法を提示するために必須のものでもあったと考えられる。自伝の上記引用箇所直後には、さらに次の記述がある。

我々ルーマニア人は、もし西欧、アジア、そして古代的民衆的文明のようなかくも異

²⁰ Eliade, *Autobiography*, 1981, p. 202 - 203. 前掲書、1989年、278 - 279頁。

なった宇宙間の接近と対話を助ける気があれば、果たすべき役割を持ち得ると私は思っていた。〔中略〕ルーマニア文化が自らの最良のものを引き出した農民的古層はまさしく私達に文化的民族主義、地方主義を乗り越えて普遍性へ向かうことを促すところのものであった。インド、地中海、そしてバルカン半島の民衆文化に共通な要素の存在は私の見るところ、抽象的に考え出されたものであるどころか、反対に長い共通の歴史、農民文化のその果実である普遍への本能的感情が存在するのは、ここ我々の元にであることを示していた²¹。

ここからは、ルーマニア文化が有する「普遍性」こそが多文化共存を可能にする場所になり得るといふ、亡命者組織の機関誌においても記されていたエリアーデの見解が見て取れる。このような言葉を独断的な祖国愛、もしくは排外的な民族主義として退けることは可能であろうし、戦時中の「ナチス支持」への関与をめぐる議論に結びつけることも出来よう。しかし、宗教の普遍的形式と人間精神の一体性を模索し続けた宗教学者エリアーデの活動と合わせて解釈するならば、冷戦の渦中にあったルーマニア人としての立場を保持しつつ、戦後世界と向き合いながら多様な宗教的、文化的価値が共存し得る場所を提示しようとした言葉として解釈できるだろう。

5. まとめ

マッキオロとの交友の中で、エリアーデは歴史的諸宗教の基層である「宇宙的キリスト教」という存在を認識し、その普遍的特性を言語化する作業に着手した。そして戦後においては、ルーマニア亡命知識人としての問題意識に突き動かされながら、政治的イデオロギーを超えて諸民族、諸宗教が連帯するための価値規範としてこの概念を再定位するに至った。「宇宙的キリスト教」の概念は、エリアーデが諸宗教の歴史的コンテクストを正確に叙述するという宗教史学の方法論を離れて、歴史的諸宗教の下には時代地域を超えた普遍的な宗教性が存在するという信念を抱きながら、宗教のあるべきかたちを指し示すために用いた、宗教倫理的な価値志向的概念であったと考えられる。

エリアーデに限らず、宗教学の構築と展開にかかわってきた研究者の多くは、宗教のあるべき形式を追求すること、歴史上にあらわれた個別宗教を刷新することをも自身の使命としてきた。このような宗教学という学問そのものに抱合される価値規範的志向性を現代

²¹ Ibid., 204. 前掲書、281 頁。

の宗教学者がどのように受容し、展開するかということは今後、考察しなければならない課題である。エリアーデの生きた戦後のヨーロッパでは、旧植民地国の独立に伴い、ポスト・コロニアルをめぐる問題系が浮上し、多様な宗教が共存するための宗教間対話の運動などが流行した。エリアーデはこれらの問題系を意識しながら、研究者および亡命知識人として「宇宙的キリスト教」の概念を提示したのだと考えられる。もちろん、「宇宙的キリスト教」の概念が上記の問題系に対して適切な解答を示せるわけではない。しかし、人間が自らの行動原理を聖化し、それを時代地域を超えて伝承しようとする現象の理論的再定位が「宇宙的キリスト教」であることに着目すれば、エリアーデのテキストを政治集団や共同体の行動原理を分析するという視点からあらためて解釈してみる余地があろう。本稿はこのような課題に取り組むための予備的作業であり、今後はエリアーデをはじめとする宗教学の諸文献をさらに整理することで、古典研究を受容し展開するための基盤構築につなげたい。

キーワード：宇宙的キリスト教 宗教現象学 イタリア宗教研究 亡命知識人

Keywords: Cosmic Christianity, Phenomenology of religion, Italian Religious Studies,
Exile intellectual